
ヘタリア好きの4人の物語

凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタリア好きの4人の物語

【Nコード】

N9836Y

【作者名】

凜

【あらすじ】

いつもの様に4人で学校から帰っていると、いきなり知らない男達に車の中に乗せられてしまった。どこに連れて行かれるのかわからないまま30分ほど車に乗せられたままでいた。すると、あるホテルの前で車が止まった。男達の言われた部屋へ行くと大好きなヘタリアの女体化した日本がいた。「今日からあなた達には私達のいる世界で暮らしてもらいます。」といきなり言われた中学生の仲良し4人組。その世界に行かなきゃ行けない理由を聞いてみると、「私達『国』に、今大変な事が起こっているのです。それをあなた達

に助けてほしいのです。あちらに着いたらすべて話しますから今は何も言わずについてきてください。」と言われた。いったいその島で『国達』に何があつたのか4人はそれを確かめるために行くことを決意した・・・

♪ 設定 ♪ (前書き)

初めまして、凜です。たぶんぐだぐだになってしまいましたがそれで
も良いという

お優しい方はお読みください。

♪ 設定 ♪

主人公の設定です。ヘタリアのキャラは皆そのままですが、女体化してるキャラもいるのでご注意ください。

立花詩音 たちばなしおん

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は腰辺りまである。いつもポニーテールにしている。
- ・ 性格は元気、寂しがり屋。
- ・ 二次元大好き。今一番はまっているアニメは「ヘタリア」

斉藤彩 さいとうあや

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩に掛かるくらい。
- ・ 性格は元気で優しい。面倒見がいい。
- ・ 二次元大好き。4人の中で最初に「ヘタリア」にはまった。今でも大好き。

桜本香澄 さくらもとかすみ

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩にかかるかからないくらいの長さ。
- ・ 性格は大人しいが、怒らせると怖い。
- ・ 二次元大好き。詩音や彩にすすめられて「ヘタリア」を見たらはまった。

皆藤すみれ かいどう

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩にかかるくらい。
- ・ 性格は子供っぽい。かわいいもの大好き。

・二次元はまあまあ好き。 彩と詩音にすすめられて「ヘタリア」
を見てはまった。

♪ 設定 ♪ (後書き)

こんな感じの主人公設定です。次からは本編を書いていきますので
よろしく願いします!!

主人公となぞの男達（前書き）

今回の話は11月のテスト期間最終日のお話です。
私もこの前テストがありました。遊んではっかりで
勉強をしていなかったんで点数ひどいの多かったですw
w
とりあえず本編です！

主人公となぞの男達

―教室―

詩音「やつとテスト期間終わった！ねえ！今からどっかに遊びに行かない？」

彩「え…今から？」

詩「何か用事でもあるの？」

彩「別に？今日は疲れたから帰って寝たいだけー。」

詩「確かにあたしも疲れた…。じゃあ今日は遊びに行かないで明日いこ！」

明日なら休みの日だし、いいでしょ？」

彩「んー、分かった。明日ならいいよ。」

「何の話してたの？」

「あたし達もまぜて♪」

声の聞こえた方に顔を向けると、仲良しの香澄とすみれがいた。

詩「あ、香澄とすみれ！丁度良かった！

明日暇？今彩と明日遊ぼって話してたんだけど、暇なら遊ぼうよ！」

香澄「明日…？用事多分無かったから大丈夫だと思う。」

すみれ「あたしも用事無いよー♪」

彩「とりあえず、教室から出て歩きながら喋らない？」

詩「そうだね、じゃあとりあえず行こっか。」

彩の提案で4人は教室から出て、喋りながら歩く。

4人は家も近く、クラスも一緒なので毎日一緒に登下校をする。

今日もいつもの道を、4人で歩いて帰る・・・筈だった。

一台の車が4人のいる所に向かって走ってきて、止まった。

そして車内から一人の黒い服でサングラスをかけた男が出てきて、詩音たちに話しかけた。

なぞの男1「あの、失礼ですが、立花詩音さん、斉藤彩さん、

桜本香澄さん、皆藤すみれさんですね？」

詩「は、はい…そうですね。どなたですか？」

男2「私達はある方にあなた達を迎えに行ってくれと頼まれた者です。」

彩「…ある方って？」

男1「…あなた達がよく知っている方だと思います。」

とにかく車に乗ってください。私は車であなた達を言われた場所に

お送りするだけです。」

すみ「とりあえず、乗ろう？この人悪い人には見えないし、

それによく知っている人って言うてたし。誰か気にならない？」

すみれが行くなら、と他の3人も行くことになり、4人は車（7人乗りの）に乗りこむ。

主人公となぞの男達（後書き）

おかしいトコ多すぎですよね…私全然才能無い…

最後まで見てくださった方ありがとうございます！

もしよかったら感想やリクエストしてくださるとうれしいです！

車の中で（前書き）

感想やお気に入り登録などありがとうございます！

これからもよろしく願います！

昨日投稿しようと思っていたんですが家の兄がPCをずっと使っていて

できませんでした。

この前投稿したやつ、ヘタリアのことまったく出てきませんでしたね。

ヘタリアの小説なのに。とりあえずくだぐですがお読みください！

車の中で

ー車の中ー

詩「あの、私達どこへ向かっているんですか？

もう随分遠くまで来ましたよね。」

男1「どこへ向かっているかは着いたら分かりますよ。

車で移動して20分くらいですからあと10分程で着きます。」

彩「あと10分かゝ・・・しりとりでもする？」

すみ「いいんじゃない？けど普通のしりとりじゃなくて

アニメしりとりで！」

アニメしりとりとはアニメに関する事だけでしりとりするやつです。ただし、机とか鉛筆など絶対どこにでもあるようなものはダメ。というものです。

香「アニメしりとりかあ…いいよ、やろう！」

詩「あたしもやる！ルールはいつも通り、声優さんやキャラの名前有りでいいよね？」

彩・香・すみ「OK！」

すみ「じゃああたしからね…「り」からだから…「リトニア」！」

詩「さつそくヘタキャラで来たか…じゃあ「アイスランド」！」

彩「「ドイツ」」

香「みんなヘタキャラだね、えっと…「ツェペリナイ」…リトニアの料理」

すみ「「イギリス」！」

詩「「スイス」」

彩「みんなヘタリアのじゃん…」

そんな感じでしりとりをしていると、詩音達の乗っている車が、ある建物の前で止まった。

ある建物とはこの辺ではとても大きなホテルだ。詩音達は車から降りた。

男1「着きました。ここです。私達はこれで役目を果たしたので帰ります。」

男2「詩音さん達は201号室へ行って下さい。そこにあなた達がよく知っている方がいるはずです。」

詩「…分かりました。ここまで連れてきてくれてありがとうございます。」

と言ってお辞儀をした。続いて彩達もお辞儀をした。

男達もお辞儀をして、車にもどり、どこかに帰って行った。

詩「…じゃあ行こっか。誰かわからない人のもとへ。」

詩音達はホテルの中に入って、係員に案内してもらい201号室に入った。

―ホテル・201号室前―

詩「…じゃあ…開けるよ?」

詩音の言葉にみんなが頷くと、詩音は201号室の扉を開いた。

車の中で（後書き）

とりあえず扉開ける所で終わらせましたが、どうだったでしょうか？
感想をよかったらお願いします！変だったら変だっではっきり言って
下さって結構ですのでww！

あと、ヘタキャラの女体化リクエスト募集中です！

部屋に居たのは（前書き）

とりあえず、今回は前回の最後の所から始まります。
感謝くれた人、ありがとうございました！
今回はあの2人が登場します！ではお読みください！

詩「さつきは取り乱してすいませんでした。あの…本物…ですよね？」

日「はい、本物です。」

彩「けど、日本さんってマンガ…の二次元の中の人です…よね？」

日「え?! 私が二次元の中の人?! 本当ですかそれ！」

彩「そうです! そうですから! とりあえず私のこと揺らすのやめてください!」

日「ハッ…す、すいません。つい取り乱してしまつて…」

すみ「で? なぜ私達がその二次元の中の人に呼ばれてんですか？」

日「そうですね。少し説明しましょうか。あなた達が私に呼ばれた理由を。」

— (説明省略) 説明後 —

日「という事なんですが、お分かりになりましたか。」

詩「えと、つまり…」

日「今、私達『国』が大変なことになっているので、

あなた達に助けてもらいたいのです。」

彩「…何であたし達? 他にもたくさんいるなかで？」

日「それはあなた達しか私達のいる場所にたどり着けないからです。

先ほど、私が二次元の中の人と仰られたのは、おそらくその世界が

丁度二次元のところにあつたのでしよう。」

香「私達だけしか行けない? それってどういうことですか？」

日「あなた達は私達『国』と同じくらい…いえ、それ以上の存在なのです。」

すみ「あたし達が日本さんたち以上の存在? それってどういう事ですか？」

日「それは私の口からは申し上げられません。いずれご自分でお気付きになる

と思います。あなた達が何者なのか。」

詩「私達が何者か…？」

日「そろそろ良いでしょうか？先ほどの答え…」

【私達『国』のいる世界に一緒に来て頂けるのか。】「

彩「あの…日本さん。一ついいですか？」

日「はい、なんでしょう？」

彩「両親とか友達ともうその世界に行ったら二度と会えないんですか？」

日「そうですね…あちらの世界には行けないのですからそうなるでしょう。」

ですが時々こちらの世界に戻って頂けるとは思いますので大丈夫です。

二度と会えなくなるというのはおそらく無いでしょうね。」

彩「そうですか…。」

詩「…こっちの世界に帰られるんだったら行ってもいいかなあ…。」

香「詩音…？」

詩「だってヘタキャラの本物会えるんだよ？」

しかもあたし達しかその世界に行けないのなら私達が断ったら

日本さん達が困ったままだよ？」

香「…そうだね。あたしも行く。日本さん達を助けたい！」

すみ「あたしも行く！」

彩「…皆が行くならあたしも行く！」

日本は私達の答えを聞いて微笑んだ。

日「では、あなた達には私達『国』のいる世界で暮らしてもらいます。」

それでは行きましようか。」

詩「行くなってどこへ？」

日「もちろん私達のいる世界ですよ。この場所から行けますので。」

それでは…イギリスさん？もう出てきていいですよ。」

日本がそう言うところには隠れていたのかイギリスが出てきた。
しかも女体化の。

イギリス「んじゃ、行くか。」

詩「ちよつと待って！？何でイギリスいるの？どつから今出てきたの？

てか日本さんに会ったときから思ってたけどなんで2人とも女体化？」

英「質問多いなあ前…そういうのは後で話すから今は移動すんぞ。」

詩「……はい……」

詩音が頷いた後、イギリスは大きな魔法陣みたいなものを床に書いていた。

それは10分ほどで書き終わった。

英「よし、じゃあこの魔法陣の中に入ってくれ。」

イギリスに言われたとおりに私達（詩・彩・すみ・香）は魔法陣の中に入った。

詩音たちが入った後に日本、イギリスも魔法陣の中に入った。

英「じゃあ、行くか。俺達のいる世界へ。」

詩・彩・すみ・香「……はい。」

部屋に居たのは（後書き）

日「ようやく私達が出てきましたね。」

英「そうだな。」

日「それにしても私達が二次元の人なんて嬉しいです。」

英「ああ、日本はオタクだもんな。」

日「とりあえずあの子達とは仲良くなれそうですね。」

英「日本、お前なんか怖いぞ？」

日「イギリスさんもアニメやマンガをもっと好きになれば良いのです。」

イギリスがこの後どうなったかは

皆さんの想像にお任せします

感想などよかったらお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836y/>

ヘタリア好きの4人の物語

2011年12月3日20時51分発行